



## 異年齢でのプロジェクト学習の詳細を紹介

# 話し合い、自分で決めることを繰り返し、 協働して課題に取り組む力を育む

### 福岡県・私立北九州子どもの村小学校・中学校

自己のあり方・生き方を考えながら、よりよく課題を発見・解決していくための資質・能力を育成する探究学習。

しかし、生徒が自ら設定したテーマについて主体的・協働的に学ぶという点で、

探究学習における生徒の現状に課題を感じている教師は少なくありません。

本記事では、異年齢の子どもたちが、話し合いを重ねながら主体的に探究学習を進める「プロジェクト」を

教育活動の軸としている、北九州子どもの村小学校・中学校の取り組みから、

生徒主体の学びを実現するためのヒントを探っていきます。

VIEWnext 高校版2月号「誌上で見学 学びのnext」は、[こちらをクリック](#)

#### 本記事の コンテンツ

- ① プロジェクトの概要 1年間を通じた子ども主体の活動
- ② プロジェクトのテーマ設定 自由に考えられるように教師からも意見を出す
- ③ プロジェクトを進めるために 問題を解決するための方法を子どもたちと話し合う
- ④ 主体性を育むもの 全校ミーティングなどで日々話し合い、自己決定する

北九州子どもの村  
中学校  
校長

**高木秀実**

たかぎ・ひでみ

教職歴35年。同校に  
赴任して16年目。



「テアトル平尾台」  
担任

**熊本加奈子**

くまもと・かなこ

教職歴6年。同校に  
赴任して3年目。



#### 学校概要

◎学校法人きのくに子どもの村学園が、和歌山県に「きのくに子どもの村小学校・中学校」を開校。その後、福井県、山梨県、福岡県、長崎県に小・中学校を設置した。自己決定・個性化・体験学習の3つを教育の原則として、「自由な子ども」を育てるための教育活動を展開する。

**学校法人設立** 1992(平成4)年

**生徒数** 各学年定員12人(北九州子どもの村小学校・中学校)

「平尾台くらしの  
研究所」  
担任

**前田知洋**

まえだ・ともひろ

教職歴11年。同校に  
赴任して11年目。



「テアトル平尾台」  
担任

**當本百合子**

とうもと・ゆりこ

教職歴17年。同校に  
赴任して11年目。



## 1 プロジェクトの概要

### 1年間を通じた 子ども主体の活動

「プロジェクト」は、北九州子どもの村小学校・中学校の子どもたちにとって、学びの幹となる活動だ。2021年度は、小学校では、劇づくり、生き物・クラフト、農業・料理の3プロジェクトが、中学校では、劇づくり、地域研究、社会問題研究の3プロジェクトがそれぞれ展開されている。子どもたちは4月に、自分の興味のあるプロジェクトを1つ選び、小学校、中学校ともに、学年の枠を超えて活動に取り組む。プロジェクトに充てられる時間は、小学校では週約14時間、中学校では週約11時間。各プロジェクトには担任が就くため、子どもたちにとってプロジェクトは、「異年齢のホームルーム」の役割も担う。

プロジェクトにおける具体的な活動内容は、子ども主体の話し合いによって決められる。小学校の農業・料理のプロジェクトであれば、どんな作物を、いつ、どのように栽培・料理するのか、中学校の地域研究であれば、地域のどんなテーマを研究の対象にするのかを、子どもたちが話し合って決定し、1年間取り組む。

ある日の小学校の劇づくりのプロジェクトでは、上演に向けて、自分たちが解決すべき問題は何か、その問題をいつ、どんな順番で、どのように解決していくのかを、子どもたちが車座になって話し合っていた（写真1）。その日の話し合いの進行役は6年生が務めていたが、学年を問わず、子どもたちは積極的に意見を述べていた。担任はプロジェクトのメンバーの一員として車座に加わり、時折、子どもたち同様に自分の意見を述べていたが、話し合いの進行は終始子どもたちが担っていた。



写真1 異年齢で劇づくりについて話し合う。1年生や2年生が自ら手を挙げて進行役を務め、上級生が進行のサポートを行って話し合いを進めることもある。

中学校の劇づくりのプロジェクトでも、生徒が進行役になって話し合いを進めていた（写真2）。話し合いの途中、進行役の生徒が、賛否を問うために挙手を求める機会が何度かあり、2人の担任は生徒と同様に自分の意見を表明していたが、話し合いをまとめるのはあくまでも生徒たちだった。



写真2 中学生のプロジェクトでも、1年生から3年生が一緒に活動に取り組む。話し合いの進行は生徒が務め、教師はそれを見守る。

## 2 プロジェクトのテーマ設定

### 自由に考えられるように 教師からも意見を出す

プロジェクトの大枠は、劇づくり、地域研究、社会問題研究などと設定されてはいるが、1年間の具体的な活動と計画は、子どもたちの話し合いによって決められる。では、子どもたちが興味・関心を持って主体的に活動できるテーマを設定するために、教師はどのような支援をしているのだろうか。

中学校の高木秀実校長は、子どもたちからテーマ案が出てくるようになるまでのサポートが重要だと説明する。

『自由に何でも決めていいよ』と、子どもたちにただ任せるだけではテーマは決まりません。考えるヒントもないまま『自由に考えなさい』と突き放してしまうと、子どもたちはむしろ不自由な状態になってしまいます。そこで、スタート時には、プロジェクトの担任が、『地域研究ならこんなテーマで研究したら面白いよ』『こんな題材の劇が楽しそう』『ニュースで取り上げられていたこの問題についてどう思う?』などと、子どもたちが興味を示しそうな具体例を挙げていきます。担任の意見を聞く中で、次第に子どもたちから、『じゃあ、こういう活動は?』と、意見が出されるようになります』

高木校長が担当する社会問題研究のプロジェクトでも、テーマを検討した際には、高木校長からいろいろな案を出したという。

「フードロスやマイクロプラスチック、自分たちの学校と公立の学校の教育の違いなど、私自身が興味があり、子どもたちも興味を持ちそうなテーマを出していくと、次第に子どもたちからも意見が出てくるようになります。大人の意見も子どもたちの意見も同列に並べて話し合う中で、学校で出るゴミの量にみんなの関心が向き始め、子どもたちはゴミの削減という活動に絞り込んでいきました。テーマ設定は簡単なことではなく、1か月以上かかることもあります。子どもたちが納得するテーマが決まるまで、子どもたちと話し合うようにしています」(高木校長)

中学生の地域研究のプロジェクトの担任を務める前田知洋先生も、プロジェクトのテーマ設定には紆余曲折があると話す。



中学生の社会問題研究。ゴミの削減というテーマを深めるための研修旅行の行き先、費用の検討、訪問先や宿泊先との連絡・交渉も子どもたちが行う。



2020年度の小学生の建築・木工プロジェクトで製作したツリーハウス。例年、テラスやブランコ、小屋など、学校生活をより豊かにするものを製作する。



中学生の地域研究のプロジェクト。開拓団の暮らしの再現をテーマにして、茅葺き住居造りと野菜作りを中心に活動を進める。そのほかにも、地域で採掘される石灰岩と石英の採取からセメントを作るチーム、森林や林業の役割を調べるチームなど、4つのチームに分かれて活動している。

「21年度の地域研究のプロジェクトのテーマは、開拓団の暮らしを中心とした地域の戦後史です。ただ、開拓者の暮らしといっても子どもたちの興味はバラバラでしたから、具体的な活動を決めるまでには様々な意見が出ました。当時の住居を再現してみようといった声上がる一方で、『動物を飼いたい』といった意見も出てきました。どんな意見も尊重したいので、そうした意見を出した生徒には、『なぜ動物を飼いたいのか、飼うことでどんなよいことがあるのかを、みんなに伝えよう』と声をかけ、プレゼンテーションをしてもらいました。提案を聞いたほかの生徒から『動物を飼うのは楽しそうだけど、森から木を伐り出してきて、その木を自分たちで加工して家を造ってみたい』という意見が出ると、その生徒は再考し始めました」

話し合いを経て、プロジェクトでは、当時の住居、農業、料理の再現に取り組むことになった。子どもたちは、資料を読んだり、当時を知る開拓者の方々から話を聞いたりすることから活動を開始した。学んだことを生かして実際に畑を耕すなど、自分の体を使ってものをつくり解放感や達成感を味わう中で、子どもたちは自信を深めるとともに、当時の暮らしへの関心をさらに高めていった。

「子どもたちにとって没頭できるほど魅力的な活動であること、活動自体の価値を子どもたちが感じられること、手や体を使った仕事をして感情的解放が促されること、そして、活動の中で直面する様々な課題を、思考を巡らせ、協力しながら解決していくことがプロジェクトでは不可欠です」(前田先生)

### 3 プロジェクトを進めるために

## 問題を解決するための方法子どもたちと話し合う

中学生のある週の時間割を見ると、終日プロジェクトの曜日もある。調べ物をしたり、校外に出かけたりと、日によって活動は色々だが、教師が子どもたちに指示を与え、子どもたちがそれに従って行動するような場面は、1日を通してもまず見られない。

「何を、いつまでに行うという工程を子どもたち全員が理解しているので、大人の指示を待たずにすべきことに取り組みます。もちろん、たまには話し合いや調べ物に集中できない生徒も出てきます。そんな時は、大人が別の生徒に、『今日、〇〇さんは話し合いに集中できていなかったみたいだけど』と相談し、プロジェクトの人間関係の中での解決を促します。ただほとんどの場合は、大人が動く前に子ども同士で『どうしたの?』『一緒にやろうよ』と声をかけ合っています」(高木校長)

感情、知性、社会性(人間関係)の面で自由な子どもを育てることを教育理念とする同校。感情面での自由は、「自己肯定感を持って毎日を過ごし、自分自身を見つめている状態」、知性面での自由は、「興味を広げ、情報を精査し、探究している状態」、社会性の面での自由は、「自己主張ができ、話し合いの必要性を感じ取って協力ができている状態」だ。プロジェクトでも、その3つ

の面で子どもたちが自由であることが重要だと、中学生の劇づくりのプロジェクトの担任を務める熊本加奈子先生は話す。

「グループ活動の中での子どもたちの様子をよく見ていると、自分の意見を十分に主張できない子、逆に主張しすぎる子がいて、社会性の面での自由が保てていないように感じられる時期がありました。そこで、一人ひとりの役割を改めてみんなで確認したり、協働するグループを変えてみたりすることを提案したこともあります」

ただ、そうしたプロジェクトの問題点は、教師が気づいた段階で、生徒自身も自覚しているように思うと、中学生の劇づくりのプロジェクトの担任である當本百合子先生は話す。

「みんなが自由に自己主張できていないと感じる時、子どもたちから『みんな、意見を言おうよ』といった言葉が出てくる場合があります。子どもたちも直面している問題に気がついているのです。だから、発見した問題に対して、こちらからすぐに答えを提示するのではなく、子どもたちから解決案が出るのを待ち、必要に応じてアドバイスをするのが私の役割だと思っています」

プロジェクトが停滞していると感じた子どもたちから、「なぜ役割分担がうまくいかないのか」「話し合いで発言する人が偏るのはなぜか」といった議題で話し合いが提案されることもある。

「先日、私のクラスで、どうやらみんなが意見を言いやすくなるのかを話し合いました。『話し合いの進行が速すぎて意見を言えない』『言おうと思ったら、ほかの人に言われる』などと、いろいろな声が上がりました。私と中学3年生の生徒が意見を出しすぎなので、ほかの人が発言しやすくなるような配慮が必要だと生徒たちが指摘してくれました」(前田先生)

#### 4 主体性を育むもの

### 全校ミーティングなどで 日々話し合い、自己決定する

みんなで話し合い、役割を分担しながらプロジェクトを進められるのは、同校の子どもたちが、普段の学校生活においても何事も話し合っていて決めているからだろうと、高木校長は説明する。同校では週1回、小学生、中学生、教職員が集まり全校ミーティングが開かれる。そこでは、学校行事の開催から人間関係のトラブルまで、実に様々な問題を、話し合いを通じて解決していく。子どもも大人も同じ立場で話し合い、多数決の際は1人1票のため、大人の意見が重視されることもないという。

「子どもたちにとって、学校生活のすべてが話し合いと自己決定の連続ですから、話し合った方がよりよい答えが得られることを、子どもたちは体験的に理解しているのだと思います。主体的かつ協働的にプロジェクトを進める力は、プロジェクトの時間の中だけではなく、学校生活全般で育まれているものなのです」

話し合いを大切にする中で、自己主張する力と他者を尊重する力は同時に育まれていると教師たちは考える。

「本校の子どもたちは、自分の考えや気持ちを主張するけれど

も、ほかの子の思いも尊重することができます。話し合いの最後に多数決で決めることになっても、少数派の意見を大切に、さらに話し合いを続けようと、子どもたちから声上がることもあります。そうした点も、普段から話し合いをしているからこそできることでしょう」(熊本先生)

「私の担当するプロジェクトで、『動物を飼いたい』という意見が出た時も、ほかの子が、『開拓団の人たちも動物を飼っていたはずだから、調べてみるといいよ』と、提案した子にアドバイスしていました。自分とは違う意見も受け止めて、意見を出した本人の願いをかなえてあげようと考えたのでしょう」(前田先生)

常に話し合い、自分たちで決めていくプロジェクトを通して、子どもたちは「どう生きたいか」を考えると、當本先生は語る。

「人に決めてもらうのではなく、自分で決める中で、自分はどの生きたいのかが見えてくるのではないのでしょうか。だから高校進学の際にも、成績だけで志望先を決めなくて、どんな勉強をしたいのか、どのような高校生活を送りたいのかを考えて進学先を決めています。プロジェクトをはじめ、学校生活の中で様々な自己決定を続ける過程で、自分の進路を考えるのだと思います」

子ども主体の学びを実現する上で最も重要なことは、失敗は子どもの権利であり、責任は大人が取ることだと高木校長は語る。

「子どもたちが自分で考えて、主体的に動けば、ちょっとしたミスも起こります。それなのに、『自由にやってよいけれど、何かあったら責任は自分で取りなさい』と言うようでは、子どもの体験的な学びを萎縮させてしまいます。『どうしてちゃんとできなかったのか』と叱責するのではなく、『どうしたら次はうまくいくかな』と声をかけることが大切なのです。失敗しても責任は大人が取るという安心感があるから、子どもたちは安心して主体的に学び始めるのだと思います」

## 中学生の考え

「楽しい」けれど、  
楽ではない。  
「自由」だけれど、  
いい加減ではない。

中学1年生・Hさん

劇づくりのプロジェクトに所属しています。上演までのスケジュールや、劇の内容に関連する専門家に会うための旅行、劇づくりでの経験をまとめた冊子づくり、上演後のパーティーなどについて、みんなで話し合っ決めていくのはとても楽しいです。でも、話し合うことがいっぱい、簡単に結論が出ないことも多く、頭がパンパンになってしまうことがよくあります。

この学校は自由だけれど、人に迷惑をかけることはしてはいけないと思っています。冊子づくりのために原稿を書く機会がとても多いのですが、提出が遅れるとみんなに迷惑をかけてしまうので、家に持ち帰って書くこともよくあります。小学6年生の時に、クラスの大人(\*)から「約束を守らないことが多いと、信用してもらえなくなるよ」と言われましたが、そうだなと思います。

\*同校では、教師と子どもとの垣根をなくすため、教師のことは「先生」ではなく「大人」と呼んでいる。また、一人ひとりの教師は、子どもや保護者から愛称で呼ばれており、高木校長は「ぶーちゃん」、前田先生は「ともびー」だ。